

「宗教裁判」により「冒瀆罪」に処せられたイエス。さらに二つ目の「政治裁判」にかけられます。

## ✠ イエスの十字架上の死と復活 (5) 十字架への道 (3)

### 裁く人たち② — ユダヤ総督による「政治裁判」

イエスは、死刑の執行権を持つローマ人のユダヤ総督ポンティオ・ピラトのもとに連れて行かれました。しかし、ピラトはユダヤ教徒ではないので、彼にとってイエスが「偽のメシア」かどうかはどうでもよかったのです。そこでユダヤ教の指導者たちは、イエスをローマの支配に反逆しようとする「政治犯」として訴えようとします。そのようすを『ヨハネ』18章28節から少しずつ読んでいきましょう。(内容をより理解していただくために、[ ]内に『ガリラヤのイエシュー』にある山浦玄嗣先生の補足文を入れました。( )内は筆者の注釈です。初めに「ゴシック体」の部分だけを読み、次に[ ]内の「丸ゴシック体」を加えて読んでみてください！)

.....

28 人々は、イエスをカイアファ(この年の大祭司)のところから総督官邸に連れて行った。明け方であった。しかし、彼らは自分では<sup>けが</sup>穢れ人たる<sup>えびす</sup>夷狄(異民族・異邦人、ここではローマ人)の住まい、]官邸に入らなかった。<sup>けが</sup>汚れないで<sup>すぎこし</sup>過越の食事をするためである。29 そこで、ピラトが[<sup>はるつゝ</sup>属領民の分際で高貴な身分の自分を穢らわしい夷狄と見なし、いつもながら身の程を<sup>わきま</sup>弁えずにわざわざ屋敷の入り口まで自分を呼び出して騒ぎ立てるこの厄介者どもの厚かましさに舌打ちをし、苦虫を<sup>か</sup>噛みつぶしたような顔のまま、]彼らのところへ出てきて、「どういう罪でこの男を訴えるのか」と言った。[既に訴状は読んでいるはずであるから、この発言はまことに人を食ったものであった。ピラト卿は露骨な軽蔑をこの一言にこめたのだ。] 30 [むっとした]彼らは答えて、「この男が悪いことをしていなかったら、あなたに引き渡しはしなかったでしょう」と言った。(傍線、筆者)

.....

もし「ゴシック体」だけの文章だったら、なぜ総督官邸に入ると汚れるのか、あるいはローマ人・ピラトのユダヤ人たちに対する気持ちがわかりませんか。「山浦聖書」はこれだから有難い！

### ピラトの尋問

ピラトは「おまえたちがイエスを引きとって、自分たちの律法に従って裁け」と言いますが、ユダヤ人たちは「私たちには人を死刑にする権限はありません」と、あくまでもローマ法のもとで「政治犯」としての処罰を要求します。そこで仕方なくピラトは官邸に戻り、「お前はいったい何をしたのだ」とイエスに問います。イエスは、『わたしの国は、この世には属していない。もし、私の国がこの世に属していれば、わたしがユダヤ人に引き渡されないように、部下が戦ったことだろう』(36節)と、自分はこの世の政治的なことには関わっていないと言いました。ピラトは、祭司たちがこの男を死罪にしてくれと言うくらいだから、ローマ帝国に対して謀反をはたらこうとする武力集団の親分かと思っていましたが、自分はこの世の政治的出来事には関わりがないと言われたので、あらためて確かめようとします。

.....  
37 [ローマ帝国の法官ピラト卿にとりイエシュさまが自ら王<sup>みかど</sup>を僭称<sup>せんしょう</sup>したか否かだけが問題であった。もしそうなら有罪であるが、そうでなければ、具体的な反乱の事実がない以上、無罪である。] そこでピラトが、「それでは、やはり王なのか」というと、イエスはお答えになった。「わたしが王だとは、あなたが言っていることです。わたしは真理について証しをするために生まれ、そのためにこの世に来た。真理に属する人は皆、わたしの声を聞く。」

(下線部はわかりづらいと思いますので、『山浦訳』で読んでみましょう。)

「わたしが、この世に生まれ、この世に来たのは、人の真<sup>まこと</sup>の生き方についてはっきりと教え、いかにももつともだと悟らせてやろうとてのことでござる。すべて、人の生き方の真の道を踏み行う者は、このわたしの声を聞くのでござる。」

.....

## イエスの沈黙

同じ内容の箇所を『マルコ』と『ルカ』で見ると、いずれも『それはあなたが言っていることです』とだけイエスは答えています。『マルコ』ではそのあと、ピラトが『何も答えないのか。あのようにお前を訴えているのに』と詰め寄りますが、イエスは『もはや何もお答えにならなかった』とあります。つまり「回答拒否」の姿勢をとったのです。なぜイエスは何も答えなかったのでしょうか。

「神の国」の到来を宣べ伝える — これこそイエスのさまざまな言動を意味づけてきたものでした。ところがこのままでは、「神の国」があと3日で来ると断言した通りにはなりそうもない(「第42回」の「神殿破壊」参照。「俺は人間の心に本当の神殿を三日で造るぞ」、すなわち、「神の国」の到来を宣言)。差し迫る自分の死の前に、まだ「到来すると信じている」、あるいは「信じようとしている」イエスにとって、「お前はユダヤ人の王なのか」というピラトの問いは、彼にとって全く意味のないものだったのです。『自分に迫りつつある死の意味が見えない』ことに直面していた(大貫隆先生)のです。

## イエスを救おうとするピラト

ピラトにはイエスに対する無関心と、見下し蔑む気持ちしかありませんでした。またイエスがユダヤ人たちが訴えているようなローマ帝国への反逆者にはどうしても思われませんでした。具体的な反乱の事実がどうしても見いだせなかったからです。彼はユダヤ人たちに対して、『わたしはあの男に何の罪も見いだせない』(38節)と言い、何とかこの事件を穏便にすまそうとしました。そこで彼は、「過越祭<sup>すぎこしき</sup>」の期間中には犯罪者のうち一人を釈放する慣例があったので、これを利用することを思いつきました。

この頃、『マルコ』によると、反ローマ的『暴動のとき人殺しをして投獄されていた暴徒たちの中に、バラバという男がい』(15章7節)ました。(『ヨハネ』では「強盗」の罪(18章40節)となっています。) ピラトは次のように考えた — と、山浦訳にあります。

.....

このバラバなるものは攘夷派<sup>じょうい</sup>(反ローマの武力集団)の頭目<sup>しもじも</sup>で、下々の者どもはかねてから熱烈にそのお解き放ちを望んでいたものでござる。されど、これは皇帝<sup>おおみかど</sup>(ローマ皇帝)に弓引く謀反人。もしこの者を釈放すれば、熱烈攘夷党の反乱が息を吹き返し、帝国にとっても厄介事となるは勿論<sup>もちろん</sup>、ユダ

ヤの国と民の行く末を危うくする。ヘロデ王家にとっても、大祭司<sup>おおかんなき</sup>一派(ユダヤ教の指導者たち)にとってもこれだけは避けたいところでござる。バラバと、この無害な乞食坊主<sup>こつじき</sup>(イエス)とを天<sup>てん</sup>神<sup>じん</sup>にかければ、この者どもはイエシュエの釈放を選ばざるを得まい。ピラト卿はこう思案したのでござる。

..... ( )内は筆者註釈 .....

バラバを釈放すれば、ローマへの反乱を目論む連中がまた蜂起するかもしれない。当時のユダヤ王だったヘロデや祭司たちにとっても、これは望ましくないだろう … と考えたピラトは、『あのユダヤ人の王を釈放してほしいか』と群集に問いかけます。しかし群集は『その男ではない。バラバを』と叫びました。ピラトの思惑は外れ、人々はバラバの釈放を選んだのです。

### 「殺せ。殺せ。十字架につけろ」

そこでピラトは命令し、イエスを「鞭打ちの刑」に処します。使用される鞭は、何本かの革紐の先に鉄の重り<sup>かぎ</sup>(鉤のようなもの)を結びつけた恐ろしい道具であったといわれます。その鞭で裸の全身を打たれるわけです。想像してください。皮膚は切り裂かれ、骨は露出し、血まみれになります。さらに鞭ですから、体のどこに飛んでくるのかわかりません。どこに当たるかを意識し、身構えることができませんから、その痛みは倍増するわけです。多くの場合に、打たれる者はすでにこの段階で絶命したといえます。『パッション』という映画でこの鞭打ちの刑の場面があり、映画だとはわかっていても思わず目を背けたくくなりました。それほど惨い刑です。

さらに兵士たちは茨<sup>いばら</sup>を編んで冠をつくって、イエスの頭にグサグサと突き刺し、かぶせます。医師である山浦先生は、『頭の皮は激しく出血するものである。無数の鋭い棘<sup>とげ</sup>に突き刺されたイエシュエさまの頭からは鮮血<sup>りんり</sup>淋漓とほとぼしり、お顔は朱<sup>あ</sup>けに染まって見るも無<sup>む</sup>慚<sup>ざん</sup>な有り様とは成り果てた』と想像しておられます。

イエスが茨の冠をかぶり、紫の服を身につけて連れ出されると、祭司長たちや下役たちは『十字架につけろ。十字架につけろ』と叫びました。ピラトは再び『私はこの男に罪を見いだせない』と言いますが、ユダヤ人たちは「この男は神の子と自称したので、律法に従えば死罪に当たる」と譲りません。さらに、『もし、この男を釈放するなら、あなたは皇帝の友ではない。王と自称する者は皆、皇帝に背いています』と脅しました。「イエスを釈放すれば、ローマ皇帝から総督として任命されているあんたは、どうなるのかね …」というわけです。

ピラトは万策尽き、イエスを裁判の席に着かせ、ユダヤ人たちに『見よ、あなたたちの王だ』と言うと、彼らは『殺せ。殺せ。十字架につけろ』と叫びました。ピラトがさらに『あなたたちの王をわたしが十字架につけるのか』と言うと、祭司長たちは『わたしたちには、(ローマ)皇帝のほかに王はありません』と答えました。祭司長たちは内心では嫌っているローマ皇帝を「自分たちの王」だと認めてまでも、イエスを抹殺したかったのです。ピラトは呆れかえりながら、「これで厄介なことも終わりだ」とばかり『十字架につけるために、イエスを彼らに引き渡した』のでした。

### かわいそうな(?) ポンティオ・ピラトさん

イエスを救おうとしたピラト。カトリックの信者が『ロザリオの祈り』(通常5連×1連=珠10個+区切りの1個)で環をつくり、それに十字架と5個の珠がついた数珠をロザリオといい、それを手にしながら祈ります。祈りの内容は、後日ご紹介します。)をするとき、最初に『使徒信<sup>しと</sup>条<sup>しんじょう</sup>』を唱えるのですが、その中に彼の名が出てきます。最初の部分だけご紹介します。

『天地の創造主、全能の神である父を信じます。父のひとり子、わたしたちの主、イエス・キリストを信じます。主は聖霊によって人となり、おとめマリアから生まれ、ポンテオ(本によっては「ポンシオ」)・ピラトのもとで苦しみを受け、十字架につけられて …』と続きます。

信者さんがこれを唱えるたびに彼の名が出てくるわけですから、「イエスの死刑判決を下したピラト」として彼を知らないカトリック信者はいません。かわいそうに(!?)。「オレ、そんなにワルじゃねえよ！ 総督の地位を守ろうとしただけだよ。よほど祭司たちの方が薄汚いぜ。よく聖書を読んでくれよ！」、なあ～んて、天上で言ってるかもしれません。

## ピラトさん、あなたにも大きな功績がありますよ！

『ピラトの名前が『使徒信条』に盛り込まれていることには二つの理由がある』と、神学講習会で3度ほどお話をお聞きすることができた阿部仲麻呂先生(上智大学大学院及び日本カトリック神学院兼任講師)が書いておられます。その二つの理由とは —

I 「キリスト者に人間の弱さを思い出させるための代表者」としてピラトの名前が出てくる。

『イエスを何回も助けようと努め(中略)、ユダヤ人の王、救い主イエス』という名札を十字架の柱に付けさせ』たので、『本当はイエスをかばおうとした人物』であり、『私たちもピラトのように周囲の圧力に屈してしまい、誤った判断をすることがあるからです』と先生は考えます。

II 「イエスが歴史的に確かに存在したという事実を証明するための同時代人」として、ピラトの名前が刻まれる。

『使徒信条』は「人間の弱さ」に目を向けさせると同時に、「イエスの歴史的存在感」を保証するためにピラトという象徴を設定して』いると先生は書いておられます。「イエスは実在しなかった」と言う人々に対して『イエスが確かに地上で生きていたこと』を認めさせる一助となる』のがピラトの存在なのです。よかったネ、ピラトさん。

阿部先生の専攻は「基礎神学」や「教義神学」などのほかに「美学」もあり、講習会ではイラスト入りの手作りの資料をいつも用意されます。数年前の講義で「社会問題に関して、いろいろ意見を述べたり行動する神学者や大学の先生もいなければならないけれど、机に向かって黙々と研究に没頭する神学者もいていいのでは …」とおっしゃっていました。まさに「学究肌の神学者」ではないかと思えます(わたしの憧れた在り方です)。でも決して「近寄りがたい先生」ではなく、著書にサインをしていただいた時、「感謝」という文字とともに、「野の花・空の鳥」のたとえ話を表すイラストを添えてくださったほどの優しさと個性あふれる先生です。

今回は、イエスの十字架刑とその意味について書きたいと思います。

### 【引用・参考にした書籍】

- ・山浦玄嗣 『走れ、イエス』 / 『ガリラヤのイエシュー』
- ・阿部仲麻呂 『使徒信条を詠む』(教友社、2014)      ・日本聖書協会 『聖書 新共同訳』
- ・新約聖書翻訳委員会訳 『新約聖書』      ・『岩波 キリスト教辞典』
- ・遠藤周作 『遠藤周作文学全集 11 評伝Ⅱ』より 『イエスの生涯』
- ・大貫 隆 『イエスという経験』      ・山我哲雄 『キリスト教入門』